

入選

気づかいのリレー

山形県 第四小学校
四年 石川 香菜

「車が通るから片づけなくちゃ。」

と友達のゆずきさんが言った。友達と3人で公園に遊びに行くところ、道路にごみがちらかっていた。カラスが集せき所にあるごみぶくろをつついたようだ。ちらかっていたのは、生ごみやカップラーメンのようきだった。(わたしの家のごみじゃない。いやだな。)本当は片づけたくなかった。わたしとふたばさんは、

「地いきの人がやってくれるよ。」

と言った。でも、ゆずきさんは、集せき所にあるほうきとちりとりを持ってそうじを始めてしまった。だから、わたしもやるしかなくなって、向かい側にある別の集せき所にあつたほうきで、ごみを集めることにした。取りきれないごみがあり、虫もよってきて、苦労した。しばらくすると、近所のおじいさんが声をかけてくださった。わたしは、助けてほしくて、

「ごみ捨て場がカラスにあらされていたから、そうじをしているんです。」

とこたえた。おじいさんは、すぐに自分の家からトングともえるごみのふくろを持ってきて、いっしょにごみの片づけをしてくれた。お願いしたわけではないのに、やさしい人だなと思った。

少したつと、ランニングをしていたおじさんが、何をしているのか聞いてくれた。事じょうを話したら、おじさんはポケットから出した手ぶくろをつけて、そうじを始めた。すどおりしてもいいはずなのに、すごい。

ごみぶくろにネットをかけて、しあげをした。やれるだけはやった。すっきりした。片づけをしている間に公園に行く時間がなくなって、その場から一番近いわたしの家で遊ぶことになった。でも、なんだかそれでいい気がした。

その日の夕方、おじいさんが学校に電話をしてくださり、次の日には学校でわたしたちがしょうかいされた。おじいさんが「秋葉さん」というお名前だということもわかった。秋葉さんから話を聞いた担任の岩田先生は、学校の帰りにコンビニの駐車場でごみを拾ったと話していた。

その後、わたしはお母さんといっしょにごみを出しに行った。すると、ごみぶくろからはみ出して、ちらかっているごみがあった。近くにあるほうきを取りに行き、ごみを集め、ふくろに入れた。やっぱりすっきりした。ゆずきさんのひとことから始まった片づけが、わたしとふたばさん、秋葉さん、ランニングのおじさん、岩田先生、そしてお母さんとわたしにつながった。ゆずきさんがわたしてくれたバトンがリレーみたいにわたされていった。気づかいのリレーだ。

ある朝、友達といっしょに登校するとき、別の集せき所のまわりにまたごみがちらかっていた。片づけたほうがいとわかっていたけれど、勇気が出せなかった。はずかしいし、やっぱりきたくないと思ってしまった。今思い出すとくやしい気持ちになる。わたしは「気づかいのリレー」のバトンをもらおうとできるのに、まだゆずきさんのような第一走者になれない。どうすれば勇気が出せるのかな。次はバトンをわたせるようにがんばりたい。